

群馬県 群馬板倉農協

〒374-01 群馬県邑楽郡板倉町岩田1003
☎0276-82-1251

「先生、群馬板倉は、県下でナンバーワン農協ですよ。今日は、その組合長もお話を聞きに来られます。ぜひともご挨拶を！」

一月中旬、群馬県館林市での講演会のことである。市内在住で専業農家の笠原誠司さんから、こう話しかけられたのは驚いた。だいたい小生の講演には農協関係者がやってこないのが通例だ。それが組合長が直々にやってくる。よほど変わり者の農協組合長かなと最初は思ったぐらいだった。

笠原さんの推薦はふるっている。オラの農協より、隣の群馬板倉こそ農協運動の原点のような農協であるというのだ。「館林市農協は、信用事業に特化して農協の良さをなくしたね。その信用事業も中途半端でね。それに比べてというのが、群馬板倉のガンバリだよ」

笠原さんは、自分が作ったという資料

特産キュウリを独自ルート で出荷する営農中心の農協

良い農協は「こころ」が違う！
エグゼレント農協探訪記

19



農業評論家
土門 剛

をその講演会の前にFAXで送ってき
た。館林農協と群馬板倉農協との経営
力対比だ。

▽営農中心の筋肉質

まず両農協の簡単なプロフィールを
紹介しておこう。キュウリ生産で出荷
量で日本一として知られる館林市は、組
合員（正・准）7600人で貯金が11
78億円の都市型農協でもある。これに
対し群馬板倉は、同じくキュウリ生産が
主体の営農中心型農協である。組合員は
2600人（同）で貯金が333億円。
一戸当たりの貯金額。館林市は180
8万円で県内ランキング1位。キュウリ
の営農代金のほかに、土地売却代金や兼
業収入にも支えられている。これに対し
群馬板倉は1397万円の3位。あくま
でメインは営農収入。あれやこれやを勘
案すれば、営農収入を中心に3位に食い
込んだ群馬板倉の大健闘が目立つ。

貯金額を職員一人当たりで割ってみた
場合はどうか。職員一人当たりの販売高
のようなものだ。群馬板倉は1996万
円。館林市1842万円。前者に軍杯が
あがる。それだけ効率のよい経営をして
いるといえよう。

共済でも同じ傾向が出ている。長期共
済の契約高を職員一人当たりで見れば、
群馬板倉は2015万円、館林市は15
53万円。

営農面はどうか。組合員が農産物を農
協に出荷する販売高。一戸当たりで見れ
ば群馬板倉は2732万円。館林市は2
598万円。

信用、共済、経済事業トータルで労働
生産性は、群馬板倉は県内ランキング2
位、館林市は7位だ。

その笠原さんに連れられて群馬板倉農
協を訪れたのは、講演会が終わって10日
ほど後のことだった。関野組合長に取材
のお願いをした際、関野組合長から軽
いジャブを入れてきた。

「うちは笠原さんにお誉めをいただくよ
うな立派な農協でもないんです。お隣の
館林市農協さんこそ先輩格ですよ」

ジャブの理由はすぐ分かった。特産の
キュウリではライバル産地。無用な発言
で、お隣の農協に刺激をしてはならぬ。
そんな配慮があったからだ。

取材にも同行してくれた笠原さんが、
合いの手を入れてくれた。

「そもそもキュウリは、県内では館林市
農協が発祥の地だったが、最近品質面
で群馬板倉に追い抜かれたのではない

どもん たけし／1947年大阪
市生まれ。早稲田大学大学院
法学研究科中退。「省益に走っ
た農水官僚の100日」（中央公
論94年3月）、「食管死守で焼け
たる農水官僚」（This is 読売94
年3月）、「懸案見送られた食管
改革」（同94年7月）、「食管制
度のあり方に関する調査懇談
会」（エコノミスト94年8月）
など、農業や農協問題につい
て規制緩和と国際化の視点から
の論文を多数執筆。主な著書に、
94年1月「農林中金の憂鬱」
（日経ファイナンス94）、「93年
10月「市場開放決断の日」
（日本経済新聞）、92年11月
「農協が倒産する日」（東洋経
済新報社）、「穀物メジャー」
（共著／家の光協会）、「東京を
どうする、日本をどうする」
（通産省八幡和男氏と共著／講
談社）、「新食糧法で日本のお
米はこう変わる」（東洋経済新
報社）など。大阪府米穀小売
商業組合、「明日の米穀店を考
える研究会」各委員を歴任。



関野學組合長

な。館林市農協が信用や共済事業に力を
入れてきたとが出てきたのだろう」
関野組合長は、見るからに実直な人柄
である。今でも早起きして農作業をすま
せてから農協の仕事につく。とはいえ農
作業のかなりの部分は、奥さんにしわ寄
せがいつているそうだ。

群馬板倉がキュウリ産地として市場関
係者に、その名を全国に知られるようにな
ったのは、組合員や職員の努力の賜物
であるが、それより自然の恵みに負うと
ころが大きい。

板倉町は、利根川と渡良瀬川が合流す
るデルタ地帯にある。このデルタこそ、
この地区にとつて最大の悩みのタネであ
ったが、それが最大の財産になってしま
ったのだ。悩みのタネは二川の氾濫だっ

た。何年かに一度洪水に見舞われ、その
洪水防止との闘いに明け暮れた。渡良瀬
川に遊水池が作られたのも、その洪水を
防ぐためだった。

肥沃な土壌について、関野組合長はこ
う説明してくれた。

「板倉のキュウリが美味しいのは、ここ
の土壌にポイントがあるからだよ。大昔
から川原に生えていた葦が堆積してでき
た土なんだ。ここではポッケと呼ぶがね
有機質を含んでいる。肥料要らずの土と
いうぐらい肥沃なんだ。それもタツプリ
と埋蔵されている。昔の人は、板倉には
ダイヤモンドよりも貴重な資産があると
いったぐらいだよ」

笠原さんの話では、キュウリを始めて
から、ずっと作れば売れる、売れば面
積が増えた。そんな好循環が続いてきた
のは、こんなに恵まれた土壌があつて、
真面目な農家がいだからだというのだ。
その分信用や共済事業に特段の力を入れ
ることはなかった。

「自然に貯金も共済も増えてきました。
これもキュウリのおかげがですね」

板倉地区は早くから園芸が盛んだっ
た。群馬県南部で、大規模な野菜栽培が
始まったのは、昭和30年代のことである。
農業用ビニールの開発は28年のことだ
が、館林市や板倉町の篤農家は、油障子
を被覆資材として使っていたという。稲
作の副産物である稲藁は、醸熟材料源と
して使われていた。その園芸の伝統が、
農業用ビニールが開発されて一気に開花
したのである。

大型ビニールハウス栽培が、板倉町で
始まったのは36、37年のことである。収

穫時期が格段に早く、収量、価格とも従
来のトンネル栽培に比べ上回ったとい
う。40年には国の野菜指定産地の産地指
定を受けた。この時、農協が果たした役
割は大きかった。

▽投げ師に対抗

地理的には県内で東京が一番近い。そ
れでいて流通圏的には孤立していた。外
との交流が少なく、人間もどちらかとい
えば保守的である。ある時期には業者の
餌食になりやすかった。

「その当時ここで作られた露地野菜は、
通称、投げ師と呼ばれる業者が、農家の
庭先から買い上げ、梱包して市場へ出荷
していたんです。こんな狭い地域に、そ
んな業者が28人もいましたよ。『今日は
いくらで買うか』と、投げ師がつける値
段は、東京の市場より安かったようです」
やがて町内の農家は生産出荷組合を集
落単位で結成した。「投げ師」に対抗す
るためだった。むろん目指すは東京市場
だった。

投げ師が流通の主導権を握ったのは、
トラックという輸送手段を持っていたか
らだ。棒ハンドルの三輪トラックである。
やがて農協もトラックを買って対抗する
ようになった。40年には農協内に野菜出
荷部ができ、系統共販体制の基礎が確立
した。49年には、その生産出荷組合を一
つの組織に統合、農協野菜出荷部を母体
とした板倉農協野菜出荷協議会に発展し
た。品目ごとの栽培技術の向上、品種統
一などを調整したり、まさに地域の野菜
生産農家のヘッドクォーター的な役割を

果たしたのである。

それでも業者の談合は止まらなかつ
た。それで、今度はその野菜出荷協議会
を、野菜流通センターに発展させ、商人
系業者に対抗させた。とくに代金の精算
で大きな役割を果たすことになる。

「ライバルの地元市場は、品物を出した
翌日の精算でしたが、農協は精算がいく
ぶん遅れていました。農家から、市場並
みに精算を早くしてくれと強い要望があ
りまして、新たにコンピュータを導入し
て市場に対抗すべく翌日精算の体制をと
りました」

群馬板倉農協のキュウリ出荷は年間1
万6000t。隣の館林市農協が90年に
明和農協と合併する前には全国一の出荷
量を誇った。いまは出荷量では館林市農
協の後塵を拝しているが、関野組合長は、
量は問題ではない。あくまで品質だと強
調する。その品質にも特段の力を入れる
ようになった。香りの強い品種、糖度が
高い品種、加工に適した品種など、館内
の篤農家とタイアップして新たな品種に
もチャレンジしている。

販売面にも工夫を凝らしてきた。経済
連一本に頼らない。この路線を取り続け
てきたのである。

「うちのキュウリは、農協の独自ルート
での出荷が多いが、一部は経済連にも出
している。その経済連が、うちのキュウ
リを欲しがっています。品質がよいこと
を認めてくれてるんですね」

その関野組合長に、経済連への出荷シ
ェアを尋ねたら、ニッコリと笑って「ノ
ーコメント!」と答えてきた。どうや
ら独自ルートでの出荷量が多いようだ。